

「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」における二つの mystery

勝 部 章 人

Edgar Allan Poe の数多くの短編小説の中には C. August Dupin という天才探偵を主人公にした探偵推理小説が三編ある。「モルグ街の殺人」、「マリー・ロジェの謎」、「盗まれた手紙」^{注1}である。

これらのいわゆる探偵物に対して、エラリー・クイーン、江戸川乱歩を始めとして、洋の東西を問わず、多くの批評家の議論があるが、いずれも Poe が推理小説の創始者であると賞めあげているものが大半をしめている^{注2}。

これらの三作品の中でも、代表作とされ、この小論で取りあげる「モルグ街の殺人」に対しても、密室殺人というテーマにそって議論されたものなど、多くの批評家が推理小説の枠内での作品評価に終始してきた^{注3}。

しかし、その中で Brander Matthews だけが探偵小説を一つの完成された文学作品として評価することを試みている。彼は次のように述べる。

By bestowing upon [the detective story] a human interest, [Poe] raised it in the literary scale.^{注4}

彼が述べているように、「モルグ街の殺人」を単なる推理小説の枠内でとらえるのではなく、文学作品としてとらえることによって、今までとは違った視点からこの作品を解釈することが可能になる。この意味からも、彼の役割は重要であるといえる。

そこで、この小論では、この物語を文学作品とみなすことにより、一見何の関係もないように見える、「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」をとりあげる。実はこれらの作品は mystery という共通したテーマによって描かれた作品であることに気づくからである。

そして、これらの作品を比較検討することによって、Poe の考えている mystery とはどのようなものなのかを明らかにしていきたい。

「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」は mystery という共通したテーマで書かれたものであると述べたが、各々の作品に描かれている mystery とは具体的にどのようなものなのかを考えることから始める。

まず「モルグ街の殺人」で描かれる mystery であるが、ある朝、パリのモルグ街とい

「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」における二つの mystery

う所に住んでいる L'Españaye 夫人とその娘 Camille L'Españaye が何物かによって惨殺される。その異様な殺害の仕方や逃走の仕方などから犯人の手掛りがまったくつかめない。また周囲の状況などから、この犯人は並の人間とはとても考えられず、超自然的な何物かによって犯された不可解な事件であるかのように思われる。

すなはち、この事件は、一般的には、人間の知能では解決することのできない mystery と化するのである。

警察にとっても、一般のパリ市民にとっても、この事件は mystery 以外の何物でもないのである。並の人間として描かれているこの作品の語り手も、この mystery に対して次のように述べる。

I could merely agree with all Paris in considering them [murders] an insoluble
mystery. I saw no means by which it would be possible to trace the murder.^{注5}

上の語り手の言葉に代表されるように、「モルグ街の殺人」に描かれる mystery とはこのようなものなのである。

一方、「アッシャー家の崩壊」ではどのような mystery が描かれるのであろうか。

この作品は推理小説ではないので、具体的な殺人事件などが起こるのではないが、やはり、ここにも mystery は存在するのである。

この物語の冒頭で、幼ない頃の友達である Roderick Usher に招待された語り手は、その住居である暗く陰うつなアッシャーの館の前に立ち、その不気味な光景に圧倒される。そして、ついにはその館の中に入り込むが、アッシャー家の周辺では不思議な出来事が次々と起こり、最後には、アッシャーの館そのものと共に、その住人である兄妹 Roderick, Madeline の二人が沼の中にのみこまれてしまう。その光景を目のあたりにした語り手は肝を冷してその場から逃げ去ってしまうという物語である。

この物語では、すべてが mystery に包まれている。語り手の前に現われるアッシャーの館そのものの存在も mystery であるし、なぜその館が不思議な力で崩壊するのも謎に包まれているのである。

さて、これらの二つの mystery に立ち向かうのが「モルグ街の殺人」における天才探偵 Dupin であり、「アッシャー家の崩壊」における語り手であるが、後者については、なぜ彼が Dupin と同じく、謎の観察者でありえるのかを少し説明する必要があると思われるので後で著しく述べたい。

まず、Dupin であるが、「モルグ街の殺人」で、親友であり語り手である人物は Dupin に最初に出会った時の印象を次のように述べている。

At such times I could not help remarking and admiring (although from his rich ideality I had been prepared to expect it) a peculiar analytic ability in Dupin (p.166.)

「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」における二つの mystery

ここで、Dupin は読書範囲が広く博学であると同時に、優れた分析能力を持った天才的人物として描かれていることが解る。彼は並の人間にはない知力を持ち、優れた論理的な思考力を持った人間なのである。

一方、「アッシャー家の崩壊」に現われる mystery の観察者は、アッシャー家崩壊の一部始終を目撃し、読者に語るという役割を果たすことになる語り手であるといえる。そこで、彼の性格を考えてみることは興味深い。

彼は幼ないころの友人で、アッシャー家の主人である Roderick Usher の強引な誘いを受けて、この館の前に現われる。そして不可解な戦慄に襲われながら、消極的にはあるが、彼は謎めいた周囲の雰囲気や自然現象のなせる業であると結論づける。

I was forced to fall back upon the unsatisfactory conclusion, that while, beyond doubt, there, *are* combinations of very simple natural objects which have the power of thus affecting us. (p.115.)

さらに、彼はこの建物をよく見ようとする冷静な観察者としての自分を取り戻そうとして次のようにも述べる。

Shaking off from my spirit what must have been a dream, I scanned more narrowly the real aspect of the building. (p.117.)

また物語の後半部分で、何の光源もないのにアッシャーの館のまわりを不気味な光に照らしたず、暗黒の中の不可解な光に関しても、それは単なる自然現象にすぎないと判断し、冷静な観察者としての余力を残している。その不気味な現象を語り手は次のように描写する。

These appearances, which bewilder you [Roderick Usher] are merely electrical phenomena not uncommon—or it may be that they have their ghastly origin in the rank miasma of the tarn. (p.127.)

彼は不可解な出来事を科学的に判断することにより、物事を論理的に見ることのできる人物なのである。恐怖におしひしがれるような雰囲気の中で、とかく我を忘れそうになりがちな立場にあっても、これほど冷静に物事を見られるということは、冷静な判断力と分析力を持った人物であると考えてもよい。

Poe はこの物語の語り手に、並の人物よりは科学的な目を持った論理的な人物という役割を持たせているのである。

ここで思い出されるのが天才 Dupin である。「アッシャー家の崩壊」の語り手が天才であることを Poe は物語の中で強調しているわけではないが、並以上に論理的な人物であるという点で二人は共通性を持っている。いいかえるならば、「アッシャー家の崩壊」は Dupin のような人物によって語られた物語であるといえるし、この物語は是非とも、このような人物によって語られる必要があったのである。その理由は後述するとして、前にも

「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」における二つの mystery

述べたように「モルグ街の殺人」と「アッシャー家の崩壊」という一見何の関係もないような二つの作品は、並以上に論理的な人物が mystery と立ち向かうという共通性を持った物語であることが明確になった。

そこで、Poe の作品に登場する mystery を考えるにあたって、これらの作品の mystery をもう一度考え直すことが是非必要になってくる。

「モルグ街の殺人」における mystery は前述のように、並の人間にとって、この殺人事件の犯人は超自然的な存在であるかのように思われているということであったが、Dupin にとっては、この事件は mystery でも何でもない。彼はこの犯人像について次のように述べる。

“ . . . It is not too much to say that neither of us believe in praeternatural events. Madame and Mademoiselle L, Espanaye were not destroyed by spirits. The doers of the deed were material, and escaped materially” (p.179.)

並の人間として描かれているパリ警察やパリ市民にとって、この事件は一見 mystery に見えても、Dupin にとっては mystery ではないのである。犯人は spirit ではなく地上に存在する何物かの犯行であると語る。そして、この物語の後半は天才による論理的な謎解きにあてられ、この事件の真犯人は、実は南洋産のオラン・ウータンであることを解明するのである。

この物語に描かれた mystery は mysterious ではあるが、その実、真の意味での mystery ではなく、解決可能な mystery なのである。

一方、「アッシャー家の崩壊」に描かれる mystery はどうであろうか。

語り手は随所で不可解な出来事に立ち向かい、そのつど、それらの現象は自然現象であると判断するのだが、クライマックスで、アッシャーの館が沼の中にのみこまれていく光景を目の前にし、ついにはその場所から怖れおののいて逃げ出してしまうのである。

Dupin のように科学的な目を持つ論理的な人物でさえも、なぜ、また何の力によってアッシャーの館が崩れ去ったかという mystery の前には無力であった。

Poe がこの物語の語り手を Dupin のような人物にしておく必要性がここでもうなずける。すなわち、このような並以上の論理性を持った人物ですら、この mystery の前には無力であるという事実を読者の前に示す必要があったのである。だから、この物語に描写される mysteryこそ“mystery unsolble” 解くことのできない真の mystery なのである。

以上のように、これらの作品に共通したテーマは mystery であるが、二つの mystery は異質な次元の異った mystery であることが解った。前者で Poe は解決可能な mystery を描き、後者では解決不可能な mystery を描いたのである。

では Poe はなぜこのような二つの異った mystery を二つの作品に描いたのかを考えなければならぬ。

これらの作品が書かれた時代のアメリカ東部では、ちょうど科学の夜明けといえる時代であり、科学が発達すれば、いつれ科学万能の時代が訪れるのではないかという期待感を持っていた時代であった。すべてのものが人間の論理の力で解決できるというような楽観的な面が前面に押し出された時代であったといえるだろう。だが一方では、まだ中世的な魔法や呪術なども共存し、科学と見分けがつかないような状態で人々の生活の中に蟠っていたのである。

このような時期であるからこそ、Dupin のような人物が登場してくることが意味を持つのである。人々が mystery だと勘違いしていることを、すっぱりと解決させることにより、人間の論理の力のすばらしさを示そうとしたのである。ある意味では Poe は Dupin という天才を登場させることで迷信や邪推などを振り払う啓蒙的な役割を果たせたといえる。

一方、科学がいかに発達しようと、いかに Dupin のような並はずれた論理家といえども解決不可能なものがあることを示したのが、「アッシャー家の崩壊」に描かれた mystery である。

Poe は科学万能であるかのように考えられている時代に、今日我々が感じているような科学なり論理の限界に気づき、二つの mystery を描写することで、それらを見極め、mysterious ではあるが論理によって解決可能なものと、どうしても人間の能力でははかり知ることのできない mystery が存在することを読者に示そうとしたのである。

この意味でも Poe は依然として現代にも通用する作家であると確言できるのである。

注

1. Poe の作品の題名については、一般的に日本語に訳されているものを用いた。
2. Poe を探偵小説の創始者として賞賛したものには以下のようなものがある。 Ellery Queen, *Eureka Poe*, (Ellery Queen's Mystery Magazine, May, 1965) 「ユリイカ・ポー (これがポーだ) —探偵小説の父」(佐藤良明訳)「カイエ」特集エドガー・アラン・ポー (1979年9月), pp. 194—97.
3. 密室殺人に焦点をあてて論じたものは以下のものである。荒正人, 「探偵作家—Poe」(「英語青年」1959年5月号) 文芸読本ポー (河出書房新社, 1978), pp.138—41.
4. Brander Matthews, “Poe and the Detective Story,” *Scribner's Magazine*, 42(1907), pp.283—93 rpt. David B. Kesterson (ed), *Critics on Poe* (University of Miami Press: Coral Gables, Florida, 1973), p. 63.
5. Edgar Allan Poe, “The Murders in the Rue Morgue” in *Selected Poetry and Prose of Edgar Allan Poe*, ed. T. O. Mabbott (New York: The Modern Library, 1951), p. 175. 以下この作品と “The Fall of the House of Usher” からの引用は上のテキストからのものとし、ページ数のみを表記する。